



イケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

第 511 回 「マンちゃん」先生の愛の鞭

2013.2.17

中学の時の恩師が亡くなり、通夜に参列した。佐藤恒夫先生、「マンちゃん」と呼ばれ、多くの人から愛された先生で、享年75歳とはいかにも残念で仕方がない。体育と社会の先生で、特に日本史の授業は大変楽しかった。小生が日本史に頗る興味を抱いたのは、全く「マンちゃん」先生のおかげである。認めてくれた時の満面の笑みが見たくて、日本史を頑張って勉強した。結果、少し日本史は詳しくなった。

今、特にこの時期、決して言うてはいけなことが、実は「マンちゃん」先生にはよく叱られた。その手法はいつも決まって「愛の鞭」だった。耳たぶを引っ張られたり、手のひらを打たれたり、マンちゃんの愛の鞭はいつも「痛さ」が伴っていた。

マンちゃんはバスケットボール部の顧問をやっていた。小生、バスケの部員ではなかったが、柔道とブラスバンドをやっており、生徒会長として目立つ存在だったに違いない。

目立とうが、控えめだろうが、マンちゃんの愛の鞭は、誰彼と差別なく、みんなに平等に鞭打ちされていたように思う。(でも、確か、女の子には加減していたようだ)

マンちゃんの愛の鞭を受けた多くの生徒は、今、恐らく誰も、マンちゃんを恨む者はいない。

教育やスポーツの現場で、暴力や体罰が大きな社会問題になっている。

大阪市立桜宮高校の体罰問題を受け、元巨人の桑田真澄氏(44)は、暴力指導は、戦前の軍隊教育を引きずっていると指摘。体罰について「ダメなものはダメで、論理なんていらぬ。仕返しをされない絶対服従の中で行われる。一番ひきようだ」と力説した。米大リーグでの経験の中で、アメリカの学校のスポーツ教育は「怒鳴る、殴るは一切なかつた。伸びやかに、ゆったりと野球をしていた。その中からメジャーリーガーが出る。体罰がなくても素晴らしい選手が育つという証だ」と語り、体罰撲滅を改めて訴えた。

全くその通りで、誰が、異論があるだろうか。

「暴力が教育であるはずがない」、そんなことは誰でも分かっている。

分りきった論理で、当たり前の議論が、毎日マスコミで踊っている。

暴力・暴言は論外だが…よく見ると、「体罰」(?)を受けた側の議論、受け止め方の論議がないような気がしてならない。

全く「パブロフの犬」で、ただやみ雲に、「平和が良い」と言っているのとあまり変わらない。

体罰や言葉をどう受け止めるかは、たぶん人によって違うかもしれない。被害妄想や自虐癖のある人と、ポジティブなプラス思考、陽転思考タイプの人では、同じ言動でも違ったとらえ方をするに違いない。暴言やセクハラ、パワハラを容認するつもりは毛頭ないが、あの時受けた、マンちゃんの「愛の鞭」とは、いったい何だったのだろうか？

難しい論議はさておき、今はただ、マンちゃん先生のご冥福をお祈りする。

合掌